

## サフォーク・システムの形成過程

東京大学 大森 拓磨

サフォーク・システム(1819~58年)とは、黎明期アメリカ・ニューイングランド(NE)で、都市商業銀行 The Suffolk Bank が自発的に「銀行の銀行」となる形で、発券諸銀行の兌換準備を集中化させて組成された、私的な銀行券決済制度である。この運営で、NE 所在諸銀行が発行した各銀行券通貨の減価が抑制され、地域的かつ自発的な通貨・信用管理が実現された。

システムの実態評価をめぐっては、A.ヌスバウムこそ「全面成功」を謳うが、第一期(1819~1824年)と第二期(1824~1858年)とに大別する観方が主である。第二期の終焉要因を、先学は「The Suffolk Bank の銀行券仲買の利益低下によるシステム放棄」とした。だが、どう財務が悪化してシステム放棄された後、第二期システムへどう結実したのか。この移行過程が不明である。本報告では、この過程を、The Suffolk Bank の公式史料(Whitney [1878])と貸借対照表(Weber [1999])を手掛かりに解明する。

以下が結論である。ボストン有力商人層が所有・経営に携わり The Suffolk Bank が創設され、銀行券仲買(割引購入 額面通りの兌換)による差益獲得を動因に、システムが導入される。だが、「同業他者との仲買競争の激化による銀行券割引率の低減」・「兌換請求を回避する発券銀行の続出」で、The Suffolk Bank は財務悪化を招く。この財務悪化は、1820~22年の貸借対照表から確認でき、正貨保有高・資産総額・準備率・配当率が急落している。財務悪化を契機に、The Suffolk Bank は銀行券仲買を一時停止するが、州法銀行への発券規制を求めたマサチューセッツ州法の影響で市中の銀行券流通量が低下すると、仲買を再開する。私利を動機としつつも各銀行券の兌換性を高め信用秩序の健全効果をもたらす、銀行券仲買の特性を見抜いた The Suffolk Bank は、「通貨・信用秩序の健全性」を大義に、発券諸銀行の兌換準備を自らに集中させるよう説得を始め、体系的な銀行券兌換制度の構築へと向かう。

### 参考資料

Weber, W.E. [1999] "Balance Sheets for U.S. antebellum state banks." *Federal Reserve Bank of*

*Minneapolis. Research Department.*

<http://woodrow.mpls.frb.fed.us/research/economists/wewproj.html>.

Whitney, D.R. [1878] *The Suffolk Bank*. The Riverside Press.

